

「研究のお話」

昨年7月、校内で希望者向けの防災講座を行った。参加生徒は7名。そのほか、3名の先生が集まってくださった。やってみて、時間は超過したものの、概ね好評であった。なにより嬉しかったのは、こんなに防災について考えたことなかった、もっと広めていくべきという声があったこと。こういった機会を持たせてくださった校長先生に感謝している。

さて、そもそもなぜ私がこのような講座を開くに至ったか。それは2014年の安佐南区の土砂災害にまでさかのぼる。前回のコラムで自然地理を学ぶことを決意した経緯を語ったが、どのような内容を研究するかは決まっていなかった。そこで起きたのが8.20であった。3.11のときもかなりの衝撃であったが、やはり地元で起こる災害は、それ以上にショックだった。土石流が起きた後、多くの人が復興のためのボランティアに行った。私は、怖くて行けなかったことを覚えている。被害にあわれた人に、どう顔を向ければいいのかわからなかった。

これをきっかけに、災害にまつわる研究をしようと思った。災害で悲しむ人が少しでも減ればいいと本気で思った。でもどこから手を付ければいいのかわからなかった。たまたま、当時住んでいた矢野に100年以上前の「水害碑」があり、そのことを師匠に話したところ、帰ってきた言葉が「県内にもあるかもしれないから探してみたら」であった。さりと、私の調査エリアが広島全域となった瞬間だった。

正直、調査は大変だった。図書館の地下に潜って古い文献を読み漁っては、石碑ができてそうな災害があった地域をGoogleストリートビューで練り歩き、場所を特定し、現地に赴いた。現地の図書館でまた文献を調べ、別の石碑が眠っていないか探った。時には通行人に「石碑を探しています」と声をかけた。ほかにもっといい声掛けはなかったものか。当時車を持っていなかった私は、友人に助けを借りた。よく付き合ってくれたものだ。福山から始まり、庄原、三次、大竹、三原、廿日市、安芸太田町、呉、東広島、そして広島市・・・最終的に論文に仕上げたときには34基が見つかった。2016年の2月のことだ。

我ながらよくやったと思う。探すだけでなく、34基分の地図と写真とをまとめ上げたのだから。完成した論文が人よりも1.5~2倍の厚みがあったときは不思議な優越感を覚えた。だが、これを書き終えてすぐ、2基ほど見落としていたことが判明し、私の石碑研究延長戦がはじまった。

師匠から、ここまでやったなら学会誌に投稿してみたらどうかという提案を受けた。広島県内にある災害に関する石碑の存在を広く知らせることは大切だろうと言われ、私は当初の目的を思い出した。「災害で悲しむ人を減らしたい」最初の論文を出したのは2016年12月。そして2017年4月にももう一本発表した。

論文発表後、何度か新聞社に取材を受けた。それが世に出ると、また石碑の情報が入ってきた。また追加調査だ・・・しかしこのころ、舟入1年目だった私は、あまりの余裕のなさに、調査に行けなかった。なんとか1年目を乗り切り、さあ2年目！なんと、RCCから取材。石碑の研究をしている人として、TVデビューを果たした。これで石碑の存在が世に広まれば、災害の被害とかも減らせるかもな・・・そう思ってた矢先に、「西日本豪雨」が起きたのだった。

この時は、8.20の時よりもさらに深い衝撃を受けた。なぜなら、私の住む矢野で大きな被害が出たからだ。矢野川の支流の各所で土砂崩れが起き、矢野川と合流するところでは土砂が溢れかえっていた。見たことはないがはっきりとわかった。100年前と同じだと。このとき同時に痛感した。自分はなんてのんきだったんだろう。知ってもらえば被害が減らせると本気で思っていた。甘かった。自分自身、こんなことになるなんて思っていなかった。本当の意味で、災害が「自分事」になっていなかったとわかった。

この経験が、冒頭の講座につながったのである。今、自分の立場でできることは、いかに具体的に災害をシミュレーションし、備えるべきかを伝えることだと思った。だから、それを実現できたことは本当に有意義なことであった。

先日、この講座での実践をもとにした論文を提出した。現在査読待ちである。この論文が、今後の地理教育における防災教育発展に少しでも役立てられるように、今後も発信を続けていきたい。